

吉永幸司先生は、小学校教諭になられて四年目に初めてクラス担任をされた。私はその生徒の一人として五年生と六年生の2年間お世話になった。吉永先生は国語の授業の中で詩を書く課題を出された。授業中に書いたのか宿題だったのかも覚えていないのだが、自分で書いた詩の内容は良く覚えている。

ジョン

僕の家では犬を飼っている  
名前はジョン

ジョンは他の犬を見ると  
すぐに吠える

吉永先生はこの詩を大層褒めてくださり、教室の後ろの掲示板に貼り出してくださった。先生に褒めてもらえたのはとても嬉しかった。あれから六十年余り経つた今でも自分の詩を丸々覚えているのだから余程嬉しかったのだろう。

ジョンは私が小学校三年生の時に、母親がクリスマスプレゼントだと知人からもらつて来てくれた子犬だった。動物好きの私は大喜びしてジョンを可愛がり、ジョンも私にとても懐いてくれた。間違いなく、生涯で一番嬉しいクリスマスプレゼントだった。

ジョン  
ジヨン

# ジョンと母の愛

# 国語教室

さざなみ国語教室

第523号 2025年10月25日  
発行者代表 吉永幸司  
連絡先 大津市柳川2-11-5  
Tel 077-522-1008  
発行所 滋賀児童文化協会  
NPO 現代の教育問題研究所

先日、久しぶりに教え子のＴさんとランチを共にした。彼女は数年前に離婚し、小学生の息子さんとの二人暮らし。あれこれ他愛もない話をする中で、彼女は「今度家で猫を飼おうと思っているんですけど、息子が寂しい思いをしないように、私の方にばかり気を向かわせることがないように」と言う。私はＴさんが良い母親になつたなあとほっこりした気分になった。

ランチを終えた帰り、一人で車のハンドルを握りながらハツと氣づいた。母がジョンを連れて来てくれたのは、両親が離婚し、父親が居なくなつてしまふしてからのことだった。当時、小学生の私には、母がどんな気持ちで私にジョンを与えてくれたのかなど考ふが及ぶはずもなかつた。その時の母の気持ちを教え子に気づかせてもらつたのである。

母が亡くなつて十数年。もうすぐ古稀を迎えるとする今頃になって母の愛に気づくとは、何と愚かなことであろうか。

今さらながらだけど、かあちゃん、ありがとう…。

のハンドルを握りながらハツと氣づいた。母がジョンを連れて来て来てくれたのは、両親が離婚し、父親が居なくなつてしまふしてからのことだった。当時、小学生の私には、母がどんな気持ちで私にジョンを与えてくれたのかなど考ふが及ぶはずもなかつた。その時の母の気持ちを教え子に気づかせてもらつたのである。

先日、久しぶりに教え子の丁さんとランチを共にした。彼女は数年前に離婚し、小学生の息子さんとの二人暮らし。あれこれ他愛もない話をする中で、彼女は「今度家で猫を飼おうと思っているんですけど、息子が寂しい思いをしないように、私の方にばかり気を向かわせることがないように」と言う。私は丁さんが良い母親になつたなあとほっこりした気分になった。

一  
弓削裕之

『ちいちゃんのかげおくり』(光村三下)の範読後、クラスはため息が漏れるような雰囲気だつた。すぐに初読後の感想を書いた。書き終わった子は、今の自分の気持ちや作品を表す一言を、ロイロノートに書いて共有した。

A ちいちゃんがさい「空にきました」とても悲しい話でした。ちいちゃんにはまだ人生がたくさんあつたのに空へいつてしましました。

B 朝休みが始まるまで教室で『ちいちゃんのかげおり』を読んでいた。ロイロノートの一言には、「悲しい」と書いていた。

C 私のお母さんも知つていて、私の兄ちゃんもこの話を知つていて、私も今日、この話をちゃんと読みだ、と思いました。

教科書を通して長く読まれているからこそ、こういうやり取りも生まれる。Bさんは一言を考える時、「三つでもいいですか」と聞いてから、「がんばつた」「かわいそう」「悲しい」と書いていた。みんなの「一言」を見て、友だちに聞きたいことはないか尋ねた。「青空」と書いたDさんに、「どうして?」と質問があつた。Dさんは、「読み終わつて、ちいちゃんがはじめに家族とかげおくりをした青空を思い出したから」と答えていた。

Aさんは感想を書いた次の日、朝休みが始まるまで教室で『ちいちゃんのかげおり』を読んでいました。ちいちゃんにはまだ人生がたくさんあつたのに空へいつてしましました。

F 私は、『ちいちゃんのかげおり』を読んで、今こうやって友だちと遊んだり学べたりするのは命が消えてしまつたから」とはつきりとした言葉にできない感じだつた。

G 私は一人でタブレットで『ちいちゃんのかげおり』を読んだ時は、せんそつてどんなにこわくて、きけんなんだろうとうかびあがりました。

教室でこの教材を読む意味について、改めて考えていました。(京都女子大学附属小学校)

ゲーム理論  
レボリューション  
少徳 信

夏の合同研で、主張と事例の関係は母親にゲームを貰つてもらうときの要望と根拠の関係と似ていることに気がついた児童について話した。このゲームの事例のように、自分の生活に根ざした理解の仕方は学級の子どもたちの間に広がり、「ゲーム理論」と呼ばれ、受け入れられるようになつた。今回は、この「ゲーム理論」に進展が見られたので報告したい。

2学期に入り、本格的に運動会の練習の時期になつてきた。本校では運動会の際、高学年の児童が応援団を組織するのだが、本児も仲良しの友だちと一緒に応援団に入ることを希望した。希望通り応援団に選ばれ、順調に練習をしていったのだが、毎日中休みも昼休みも応援練習をしているうちにドッジボールがしたい気持ちがわいてきた。もちろん今までの練習のときもドッジボールがしたい気持ちをもつていたのだが、赤団のみんなのために気持ちをおさえて練習に参加していた。ところがその週の金曜日の昼休みはめずらしく体育館で遊べる日で、本児はどうしても体育館でドッジボールがした

かった。どうにかして応援練習の休みをもらうために、本児は2学期の初めに学習した「文章に説得力を持たせるには」の内容を生かして団長に自分の思いを伝えに行つた。以下、本児が団長に伝えた言葉である。

「ちょっとといいですか。僕は、今週の金曜日の昼休み、応援練習の休みが欲しいと思つています。どうしてかというと、その日は体育馆でドッジボールができるからです。もちろん、団長の応援練習をしたいという気持ちもとても分かります。だから、金曜日までの練習を、誰よりも全力で取り組みます。だから、今週の金曜日、休みをください。」

この言葉を聞いた団長は、快く「ドッジボールに行つていいよ」と答えてくれた。その後本児に話してみてどうだつたか尋ねてみると、「団長が思つていることを言えたのが良かったんだと思う。もし理由だけだつたらあんな風に答えてはもらえなかつたかもしれない」と話してくれた。自分なりに相手の立場を想像して考えることの大切さに気付けたことが収穫であり、「ゲーム理論」がより発展したように感じたことだろう。まさしく「ゲーム理論レボリューション」だ。

導入にて

烟中翔太

私の学級にいるA児は、気分によつて学習に意欲がないだけではなく、授業中に別の本を読んだり寝てしまつたりすることがある。そんな子が学習に向かうきっかけを垣間見ることができた。

方などをイメージさせるために取り組むことがある。A児にとって気持ちがのらなかつたのか、なかなか音読に参加しなかつた。

「Aさん、一緒に読みましょ。」と声をかけるが、机に突つ伏していた。その後の授業でも似たような様子が続く時間になつてしまつた。

# 「んきつねの授業」 から考える 川端 由起

この場面は、登場人物のお父さん、お母さん、お兄ちゃん、ちいちゃんの四人でかけおくりをする場面であり、多くの台詞がある。まず誰がどの台詞を言っているのかを確かめ、班で役割を話し合って決めて時間内で何度も読むことにした。

この役割読みが楽しかったようで、元気な声が学級に広がってい  
た。あのA児が翌日の授業で、「今日の音読も、役割読みがいい。」と訴えてくるほどだった。

2場面になつた時、真似っこ読みをすることにした。教師の真似をして読む方法で、子ども達にとって読みにくい文章がある時に一緒に読み、声の出し方や間の取り

など活発に班の人と関わったり、大きな声で文を読んだり活動していた。それだけではなく、その後の文章を読み取る話し合いでも、見つけた言葉や自分の意見を発表することができた。

何かぐずぐず煮えていました。」の箇所で、教員が「にえているものは何でしょう?」と尋ねると、ある児童が「女たちは、兵十のおつかあを煮ています。」と真顔で発言し、石井氏が驚愕したそうです。

ませんが、常識で考えても人を鍋なんかで煮ないと何故わからぬのでしょうか。また、第二場面で、ごんの「ああ、そうしきだ。」「兵十のうちのだれが死んだんだろう。」という言葉があつたから、そう考へたという意見もでまし

5年ぶりに4年生の担任になつて、「こんぎつねの授業が出来るのを楽しみにしていました。」この「おかあを煮ている」という発言を本当に児童はするのか試したくて、第二の場面で、まず音読を行つてから「にえているのは何でしょう。」という問いかけをして、ノートに書かせました。一人目はうなぎを煮ていると書いていました。理由を聞くと、「おかあが死ん

このおつかあを煮ている発言には、読書離れとマルチメディアへの過大な傾倒があると思います。また、読書経験が少ないので、物語を部分読みしか出来ず、全体像を捉えられないのではないかと思いました。新美南吉さんの他の本を児童に読ませ、全体から登場人物の気持ちの変化を考えさせたいです。

だから欲しかったうなぎを皆で煮て、なぐさめるため。」だそうです。まだ意味がわかります。2人目、「おつかあを煮ている」と書いた児童がいました。私は驚愕し、「おかあを煮ていると書いた人他にいますか」と聞くと、3人ほど手が挙がりました。

## 学校司書との連携による 学校生活・学びの充実

学  
びの充実

本校の学習活動の充実に欠かせない力強い味方がいる。学校司書である。学校司書による充実した学校図書館の経営が行われ、子どもたちの読書活動および各教科等の学習活動の充実につながっている。年度当初には、学校司書によるアンケートが全教員に対して実施された。内容は、子どもの頃に読んで心に残った本、その理由、その本にまつわるエピソード等について。もちろん私も回答した。数日後、学校図書館へ赴くと、全教員の回答内容がそれぞれポスターにまとめられ、掲示されていた。そして、教員各自の愛読書も並べられていた。私も思わず見入った。自分のポスターを一番に確認したが、各先生方の愛読書やそれにまつわるエピソードを読むのもおもしろかった。それは本校の子どもたちにとっても同じであった。子どもたちはポスターの前に群がり、興味津々の様子。先生方の愛読書を手に取って読んだり、ポスターに書かれた内容を確認したりしていた。自分の担任の先生の愛読書を読む子。校長先生の愛読書についての説明を読む子。この掲示をきっかけに、教員と子どもた

ちの本や読書に関わる会話が生まれる。そして何より、「おもしろい」そう。私も一度読んでみよう。と、子どもたちの本との出会いの機会となつていて。

この取組は一学期のものだったが、季節が変わり、その都度学校図書館の模様替えは行われている。二学期となつたある日、学校図書館を訪れたある児童が、「あれ、先生のお気に入りの本の紹介が、なくなつていて」とつぶやいていた。よほど心に残つたのだろう。また、別の児童は、「教頭先生、私も『ずっとこけ三人組』シリーズ、好きです！」と、廊下で話しかけてくれた。掲示の工夫一つで、子どもの読書生活に大きな影響があつた。環境の大切さ、重要さに改めて気付かされた。

現在は、運動会前ということで、アスリートの自伝や、運動会をテーマにした物語、スポーツについての本が並ぶ。もしかしたら、今回紹介されている本を読んだことがきっかけとなり、運動会への意欲が高まる子がいるかも知れない。また、学校司書作成のポップを参考に、国語科のポップ作りが充実するかもしれない。期待は膨らむ。

もう一つ。各教科の単元や授業づくりへの関わりについても紹介したい。夏季休業中に、3年生の担任と司書が打合せをしていて。内容は、二学期に学習する「ちいちゃんのかげおくり」で、並行読

書を行う図書の内容や、並行読書の在り方について。入念な打合せが行われた数日後、内容充実のリストが作成されていた。これらの図書については、単に子どもたちに紹介して「読みましょう」と投げかけるだけではなく、単元の導入時に「味見読書」が司書中心に行われる予定である。押しつけや強制、子どもたちの負担にならないような機会が保障される。また、いよいよ配慮のもと、確実に子どもたちが本に触れ、興味をもてる一学期には5年生がフロー・ティングスクールに参加したのだが、児童学習航海の事前・事後に総合的な学習の調べ学習で活用する環境に関わる本、琵琶湖に関わる本の準備を担任が司書に依頼。子どもたちは豊富な資料を基に事前学習を行つて航海に臨み、事後は「うみのこ」での2日間の経験と関連させながら事後学習を行い、学びを深めることができた。司書の存在は、教員にとって大変心強く、また非常に頼もしい存在となつてゐる。